第六章　言語斷止及び文の種々相

一

從來の文法學說といふものは、餘りにも言語連續の文法に傾き過ぎてはゐなかつたか。終止形とか完結體とかといふことを問題にするにしても、連續法の附庸物として之を取扱つて來たやうに思ふ。連續法的なものとして之を說明し、毫も斷止事實の核心を把握し解明しようとしなかつたかの觀がある。斷止といふことは連續と共に文法事實に於ける相反する二大分野である。修飾とか補充とか統合とか並列とかといふやうに種々に連續するといふことは言語活動の未完結を意味し、かゝる連續を絕して斷止するといふことは言語活動の完結を意味する。連續に於て句が結成し斷止に於て文が成立する。しかも連續なきところには文法未成的事實として文法の潛在を指摘することも出來るのであるが、斷止なきところには文法事實は全く不成的でなければならぬ。斷止は連續に先立つて成立せる、文法事實の根的なものである。

かやうな斷止といふことは如何なる事であるか。それは言語活動の最現實點に立つといふことでなければならぬ。種々に連續して來た全機構を背負つて、現實の巖頭に立つことでなければならぬ。斷止點は言語活動の現實的尖端である。かゝる斷止點を一步外せば、其處は最早言語的世界ではなくて、單なる思想の世界である。しかしてそこ

には宇宙塵の如く語彙的なものが飛散し、表現の世界更に象徴の世界であり、言語活動にとつては未來的世界であると言ふべきである。之に反し斷止に負ひ重なる連續的機構内は、言語活動の過去的世界であると言へる。そこには修飾關係の如く勝義に過去的なものから、並列關係の如く寧ろ未來的な意味の竄入せるものまで、種々の機構性があるのである。しかして統合關係は力的な矛盾結合として最も現實的な機構と考へられ、それだけに又成立の優先的條件の如く考へられ易いのである。しかし統合關係は如何に現實的であり力的であると言つても、そこから眞に文が成立して行くのではない。コプラ的なものは統合關係の中心となるのであるが、それは文の生産點ではない。コプラ的なものと雖も文法的に斷止せざる以上は、矢張現實により近迫せる、過去的機構内の一結節に過ぎないのである。しかもそれらが從屬素化せる場合に於ては尚更のことである。從屬語と何等選ぶところのないものすらある。かやうに斷止といふことは、過去的機構の一切を負ひ未來的なものに臨む、言語活動の現實的尖端をなすものである。文法活動の領域と文法活動以外の領域とを分つ境界線を意味するものである。文法事實の極限位である。文法的宇宙を攝理する意味のものである。

斷止は現實の尖端であるといふことは如何なることを意味するか。それは言語活動の最も行動的なる部分であるといふことでなければならぬ。現實の尖端は直ちに行動の尖端でなければならぬ。言語事實の最も具體的にして直接的なるものは言語行動であり、言語行動といふのは單に何事かを言ふことではなく、我が汝に然々の事を言ふことであつた。我が汝に對し、話線を整へることに依つて何等かの心的交渉を行ふことであつた。かやうな言語行動の完結點が斷止點であり、そこに文が成立し、言語行動といふものゝ遂行が一先づ終了して行くのである。故に斷

止は言主の意志の表れる形であり、力の結晶、情熱の堝坩である。連續は理智の持續であり論理の展開であり、かゝる理智論理の働を絶して直ちに情意に出でんとするところに斷止が成立し、そこに文が生産せられて行くのである。しかしてかゝる情意の外は言語的無の空間とも言ふべく、其處は思想界であり、文もなく語もなく文卽語語卽文の原本的言語、語彙的言語の飛散する表現の世界、象徴の世界である。

斷止といふことを消極的に言へば、並列關係の外に出たものであると言ふことになる。單なる語彙的一點に凝縮せられてあるものが次第に分合的に弛び行くと共に修飾關係の如きものが成立し、補充關係の如きものも成立し、統合關係に至つては要素の矛盾的結合と言つた力闘的關係となり、それが更に弛緩した形のものが並列關係である。かゝる並列關係の結紐すら切れて、眞に言語的連續の外に出づるに至つたものが斷止であり、そこに樣々の文が成立して行くのである。一體言語の原始狀態として語彙的放出乃至は斷止の接踵といふ如きものが考へられるのである。未開人の言語とか幼兒期の言語とかといふものを見ると、何れもかゝる方式を以て語られてゐるのである。然るにそれが多少進歩して行けば、並列關係の如きものが次第に成立し、かくしてその中から漸次種々の連續的關係が發達して行くのである。しかしてその發達が一先づ完了せられ一定の水準に昇りたる曉と雖も、例へば急迫せる場合、激越せる場合等には矢張原始的狀態に逆轉し、語彙的改出とか斷止的接踵とかといふものが行はれるのである。故に斷止とか文とかといふものは文法活動以前の文法、文法の母胎、文法現象の宇宙であると言つてもよいのである。

普通には文といふことを斷止といふことから考へないで、連續關係から考へようとしてゐる　連續關係から文を

考へて行けば其の最も完結的なるもの、行動的なるもの、現實的なるもの、力點的なるものである統合關係に主眼を置かざるを得ないのである。しかし之に對立して統合關係を爲さゞる呼掛感嘆の如き言表形式があり、かやうなものを主述的統合の原理を以てしては如何ともすることが出來ない。そこに文定義は全く混亂に陷るのである。かゝる混亂を克服せんとして更に連續原理を擴張したものが語群體の概念である。文は語の集合せるものであるといふ考へ方である。しかし語群は必ずしも文とはならず文は必ずしも語群でなければならないと言ふことはない。所謂、連語の如きものがある一方、語文といふものがある。一方又從來の統合關係的な殘滓を潛かに保持し乍ら、之を論理學的扮飾に代ふるに心理學的原理を以て扮飾せんとするものがある。心理學は論理學に比しより寛容なる原理を與へるところから、一見したところかやうな考へ方は種々の文形式を抱擁し得るかの樣でもある。しかし言語學は論理學の從僕でないと同樣、心理學の奴婢であつてもならぬ。どこまでも言語學として獨自の原理と定義の上に立たなければならぬ。のみならず、如何に押平めたものでも、統合的に考へられたものは文と全く異なる立場のものでなければならぬ。故に語文の本質を眞に解明することが出來ないのである。かやうにして連續原理から文を解決しようとしてゐては、永久にその核心に觸れることが出來ないのである。徒に文の周圍を只廻つてゐるに過ぎない。百尺竿頭一歩を進めなければならないのである。連續を眞に超えて斷止を以てその本質を把握しなければならないのである。文法活動の斷止するところに種々なる文の生產點を求めなければならないのである。故に斷止法といふのは單なる終止とか裁斷とかといふものではなく、文成立の種々相に關する認識でなければならぬ。文法事實の單なる一部分ではなく、其の始を成し終を結ぶ底の最も根本的領域の法でなければならぬ。

二

斷止は、原始的な語彙的言語狀態にあつてはあらゆる語に可能である。總ての語が斷止し文となり得る能力を有してゐたと考へることが出來る。文ならざる語なく語ならざる文なく、發すれば文となり發せざれば語であつたとらざるものとに分れる。原始言語では語卽文文卽語の言語であつたが、文法言語となると、斷止して文となり得る能力のものと然は文となり獨立し得るものと常に附庸的なものとが分れるのである。卽ち先づ觀念語に對する種々の文法語は斷止を指標することが出來るものもあるのであるが斷止の能力はない。一體斷止指標能力と斷止能力そのものとは異なるものでなければならぬ。前者は斷止能力の能記的なものとなり得る能力であり、後者は斷止能力それ自體の全一、卽ち斷止に於ける能記所記の統體でなければならぬ。前者は後者の部分であり附庸物であり成素である。觀念語に對する文法語の中にはかゝる斷止指標能力のものがあり、眞に全一的なる斷止能力を有する語の斷止に添加せられ、之に附屬して斷止の種々相を表示するのであるが、それ自身で斷止して文を成し獨立するやうなものは絕對にないのである。觀念語の中にも從屬語はそれ自身で斷止し得る能力はない。所謂挿頭の意義はそこに在るのである。只之と形式動詞の如きものが合體することによつて陳述力を具有する事のあるのは勿論である。しかしそれは從屬語の力といふよりも、寧ろ形式動詞の力によつて斷止し獨立的となるのである。繫辭的添加によつて動詞とか形容詞とかといふものと同格的となり、それ自身斷止力を持つのである。故に眞に斷止力あるものは獨立語でなければな

らぬ。實體語とか陳述語とかいふものが眞にそれ自身の力で斷止し獨立的となるのである。獨立語といふ名稱そのものは、それ自體獨立して獨自に文となり得る能力ある語といふ意味である。しかし感動の從屬語は、眞の言語領域から逸脫し感叫語とも呼ばるべきものとなつた場合には、獨立的とも見ることが出來る。孤立語など〻稱せられるのはかやうなところからであらう。しかしそれは孤立語であるかも知れないが、眞に獨立的ではないのである。獨立語といふことの意味は、感動詞の如きものが感叫的に孤立するやうなことを意味するのではない。言語が獨立的となるといふことは如何なることであるか。それは語が單獨的孤立的となることではない。語文的となり、發すれば文發せざれば語と言つた語彙的言語狀態の言語の如きものとなることではない。全くの排他的となることではない。否、却つて他を依存せしめることがその獨立性を益々顯現せしめる所以ともなるのである。依存は獨立に反するが、依存せんとするものを依存せしめることは獨立と何等容れざるものではない。

靜かに歩く。　どん〳〵進む。

の「靜か」「どん〳〵」の如きものは單に依存するもので、勿論獨立的とは言へないが、「歩く」「進む」の如きものは依存するものを依存せしめることにより其の獨立性を傷けざるのみか、いよ〳〵それを顯揚せしめてゐるのである。又か〻る觀念語の先行ばかりではなく文法語の後行も同樣である。

歩いた　歩くさ　歩かないかね

進んだ　進むよ　進まぬかな

など〻、種々に助詞や助動詞を添加すればする程、その動詞の獨立性が保證せられるのである。かく言語が獨立す

るといふことは單獨的孤立的となるといふことではなく、却つて之に對する依存語の連續はその獨立性を顯著ならしめ強化するのである。言語の獨立は只曾その斷止性にあるのである。しかもそれは連續を超えた斷止でなければならぬ。連續に煩はされない、連續を眞に克服し依屬せしめる、絶對的斷止力にあるのである。助詞や助動詞の連續はその斷止性を延展し強化し保證する意味の能記物であり、從屬的に先行するものは之をより觀念的に擴充するものでなければならぬ。かゝる先行的構造や後行的構造を眞に超克せる斷止が言語的獨立を意味し、そこに文が生産せられて行くのである。

かやうな意味に於て、獨立することの出來るものは實體語と陳述語との外にはないのである。現實の言語狀態に於ては、實體語と陳述語とが眞の獨立語として斷止機能を有してゐるのである。しかしかゝる實體語陳述語等の獨立語が斷止機能を有すると言つても、勿論同一的な斷止法を執るものではない。實體語斷止による文と陳述語斷止による文とは異なるものでなければならない。

一太郎やあい。

あゝ、山中の青葉の美しさよ。

何といふすばらしい景色をそこに見渡したことよ。

あゝ、何と申し上げたものか。

まあ、綺麗ですこと。

の如きものと

花が咲く。

それこそ本ものである。

雨が飛石をうつてはねかへる。

あの人はとう〳〵來ませんでしたか。

お前はあちらへ行つて居れ。

の如きものとは異なるものでなければならぬ。實體文は一般的に情意的であり、陳述文は知性的である。實體文は第二人稱的であり、陳述文は第三人稱的である。

三

實體語斷止の實體文と陳述語斷止の陳述文とは、現實に行はれてゐる文の二大範疇である。文の正當なる概念は此の二つを十全に包括し得るものでなければならぬ。殊に原始的であるとか不完全であるとかと謂はれてゐる、實體文を抱擁してゐなければならぬのである。しかし文の概念を今少しく明確にし、且かゝる實體文と陳述文との本質を知らんが爲には、更にその根源に溯つて考へて見なければならぬのである。それは現在行はれてゐる感動的な從屬語の如きものが、感叫語として孤立的に放出せられる言語狀態である。感叫語の如きものを中軸とせる音聲表現は、眞の言語として取扱ふことが出來ないのであるが、それらは現在行はれてゐる言語の原鄉的なものとして緣暈的考察を加へて行かなければならぬ。然らざる限り語とか文とかといふものの眞義を未だ充分に解明することが

出來ないのである。殊に實體文と陳述文との二別の本義が明確とならぬ。

感叫語とは如何なるものであるか。それは自己の主觀的情意の直接的表現である。表情的音聲とも言ふべきものである。現在行はれてゐる感情的從屬語とか意志的從屬語とかと言つたものに類似せる、主觀的表情或は表決の音聲表現である。虫の鳴聲、鳥の囀り、獸類の咆哮叫聲等と五十步百步のものである。人間的動物音である。泣聲、笑聲、歡聲、掛聲、呼應、囃子などの如きものである。かやうなものが中軸となつて、客觀的事象に對し擬音とか象徵音の如きものも成立するのであるが、以上の如きものを總て一括して音聲表現などと稱するのである。故に音聲表現といふものを個々別々に就いて見れば種々の性質程度の相異があるが、一般的には主觀的表情的であると言ふことが出來る。謂はゞ第一人稱的狀態であると考へることが出來る。自稱的表出であると考へることが出來る。

右の如き感叫語を中軸とせる音聲表現に對し、實體文的一群は對象物に呼掛けることを本義とするものである。即ち中軸は呼掛文にあるのである。

太郎、お前そこで何してゐるんだ。

諸君、文學とは何であるか。

お花や、もう起きなさい。

あが君や、をさなの御ものいひや。

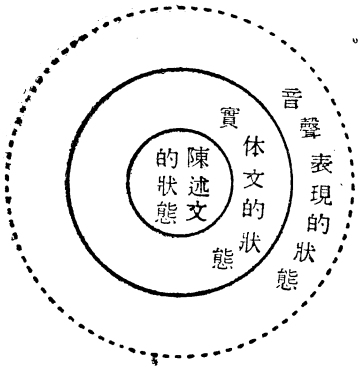
の如き呼格などと稱せられてゐるものが實體文の本質的なものである。しかしてかゝる呼掛を軸として、其の客觀

的方向に感嘆とか希望とかといふものが發達してゐるのである。故に實體文は一般的に客體的意志的であり、行動的である。つまり第二人稱的狀態であると考へることが出來るのである。對稱的表出と考へることが出來る。

感叫は主觀的狀態が根となつて生れたものであり、實體文は對象物的名が根となつて發達した文形式であるが、陳述文は分析綜合的な關係性が根となつて發達した文形式である。故に中軸は主述的統合にあるのである。勿論現示的には述格的構造乃至は主格的構造のみのものもあるのであるが、それらは主述の統合といふことを豫想しての省略的述法の如きものに外ならない。又主述統合そのものにも種々の主觀的情意の表出とか、或は質疑、命令、願望等各種各樣の形のものがある。しかし中軸部はどこまでも主語と述語との分析的綜合であり、矛盾の力的相關である。故に陳述文は一般に知性的客觀的であり、製作的と考へることが出來るのである。つまり第三人稱的狀態であると考へることが出來るのである。他稱的表出と考へることが出來る。

以上の如く先づ緣暈的なものとして感叫語を主とせる音聲表現的なものが活動して居り、その郭内に於て語彙的放出の實體文、更に關係的構成の陳述文が成立し、今日見るやうな複雜多岐なる斷止現象を呈してゐるのである。言語的生命とか言語活動とか言靈とかと稱するものは、右の如き或種の生機體的な一つの纏でなければならぬ。單なる物理的現象とか生理的現象とか、或は心理的現象社會的現象などと言つた外的自然から次第に獨立し、自律的な内的組織を成せるものでなければならぬ。

環境を超え、而もそれ自身特有の環境を持つ、特殊的な組織的活動體でなければならぬ。しかしてその環境面と接觸するところに音聲表現的外皮があるのである。



しかし、音聲表現は連續斷止といふことが未だ不分明なる狀態で、そこには眞の意味の語もなく文もなく、全くの混溷の狀態であると言はなければならぬ。單に外的自然と何等か異なれる內的狀態であると言ふに過ぎないのである。言語的生命の原鄕的なものであるが、之によつて今日言語活動が行はれてゐるものではない。語・文未顯の始源的狀態である。然るに呼掛から發出する實體文に於て先づ斷止といふことが明瞭に顯現するのである。詞の切れといふことが誕生するのである。そこに文といふものの生產が見られ、眞の意味の言語は此處から始まると言つてもよい。しかし、實體文にありては語と文とが未分的である。文ならざる語なく語ならざる文なく、發すれば卽ち文であり發せざれば卽ち語である。要は連續といふことに對し、非配意的であると言はなければならぬのである。勿論今日行はれてゐるものに就いて見れば、實體文にも連續的構造の先行するものが多々あるにはある。しかしそれらのものと雖も連續性といふことが本質的なのではなく、肝要は只管斷止性に存するのである。連續といふことを眞に配意するものは陳述文に於いてでなければならぬ。分析綜合を根とせる陳述文は、斷止と共に連續といふことを然るべく整へて行かなければならぬのである。しかしてかゝる陳述文も、最初は並列的なものから次第に眞の矛盾的結合の頂點へ發達し、又他面主從的に墮し行く方向を持つ段階的なものでなければならぬ。そこに現實的なる統合關係に對し、過去的未來的なる修飾關係補充關係、或は並列關係

の如き種々の關係性が成立して行くのであるが、それらの關係性の眞義を發揮せるものは何處までも主述的統合でなければならぬ。斯くて連續配意の文として陳述文といふものが存立し、此處に於て語と文とが明瞭に相分れ更に句とか節とかといふ如きものも見られるのである。

四

實體文は實體語の斷止によつて成立する文である。實體語斷止によつて、實體物に對して呼掛ける意味の文形式である。對客者的行動そのまゝの文である。隨つてかゝる實體文の根源的なものと言へば、例へば

坊つちやん、この方があなたのお父さんですよ。

太郎、お前そこで何してゐるんだ。

山本君、この間はありがたう。

なに、君、心配御無用だよ。

諸君、文學とは何であるか。

あなた、どうかこの事は人にいひふらして下さるな。

の如き呼掛でなければならぬ。呼掛には右の如く單に客體物を放出するものもあるが、

隣の小母さん、どこへいらつしやるの。

わが古き友ルノアル、君には腕がある。君には力がある。しかし君には信念がない。

の如く先行的に種々の修飾的工作をするものもあり、又

お花や、もう起きなさい。

坊や、そつちへ行くのではありませんぞ。

一太郎やあい、わかつたらもう一度鐵砲をあげろ。

の如く、後行的に然るべき助詞を添加するものもある。文語に於ても

櫻花、散りかひくもれ。

汝、こゝに來れ。

夫差、汝越人の汝が父を殺したるを忘れたるか。

苔の衾よ、かわきだにせよ。

夏草の茂みに生ふるまろ小菅まろがまろ寢よ幾夜經ぬらむ。

瓢や瓢や我汝を愛す。

八千矛の神の命や。

檀越や然もないひそ。

の如く口語と同樣である。

呼掛は眞に二人稱的對稱的表出であるが、かやうなものが多少第三人稱的方向に傾いたところに感嘆文がある。しかし感嘆文と雖も勿論未だ第二人稱的本質を失ふものではない。只、單に行動的意志的であつたものが、觀想的

詠嘆的色彩を添へるに至つたものであると言はなければならぬ。隨つてそれには、呼掛文の如く眞の實體語斷止といふものは極めて稀で、多くは

幹の中程に一流れながれた海の美しさ

まあ、綺麗ですこと。

わたしにはどうすればよいか分らないんですもの。

の如く、形容詞語幹（狀態的從屬語）に接辭「さ」を添へて名詞の資格に立たせたもの、或は動詞を「こと」「もの」などの抽象的實體語で受けたものを以てするのである。又かやうなものに

あゝ、山中の青葉の美しさよ。

言語道斷の大膽さよ。

何といふすばらしい景色をそこに見渡したことよ。

の如く助詞を添加するものゝあることは勿論である。文語では形容詞語幹（狀態的從屬語）に接辭「さ」を添へ名詞の資格に立たせたものとして、例へば

もれいづる月の影のさやけさ。

いとかく夜をだに明したまはぬ苦しげさよ。

の如きものがあり、又外に

うつせみの世にも似たるか。

いとかしこくとりならべてもさきけるかな。

の如く準體言を以てするものがある。この準體言を以てするものは口語で「こと」「もの」を以てするものと略〻同樣のものである。更に又

みかさの山に出でし月かも。

あはれの御物語や。

古池や、かはづ飛込む水の音

の如く實體語そのものを以てするものもある。口語でも時には詩文などで

木の葉が落ちてさびしい庭に、咲きのこる菊の花よ。

神のたふとい御心なのか、あゝ、菊のたかいにほひ。

の如く、眞の實體語斷止のものも行はれる。

文語ではかゝる實體文的なものとして、外に客體的物象に對し希望念願を以て呼掛けるものが發達してゐる。之は希望文とか願望文などと稱すべきもので、一種特有な斷止法を執るものである。しかしてそれらの中、對象物を示す語が實體語である場合と準體言である場合とがあり、前者の場合は更に、其の實體語が希望の目的格的なものである場合と其の他の補格的なものである場合とに分れ、後者の場合はその準體言が肯定的なものである場合と打消的なものである場合とに分れるのである。實體語が希望の目的格的なものといふのは例へば

老いず死なずの藥もが。

君が八千代にあふよしもがな。

の如きものであつて、普通は目的格指示の助詞「を」を伴なふことがない。しかし、實體語が其の他の補格的なものに立つ場合は

天飛ぶ鳥にもがも。

人の心を枕ともがも。

飛ぶがごとくに都へもがな。

の如く、それ〴〵特殊な補格指示の助詞を伴なふのである。以上希望の對象物を示す語が實體語である場合は何れも助詞「も」を挿入して其の主觀性を緩和してゐるのであるが、肯定的な準體言の場合は

かひがねをさやにも見しが。

いかでこのかぐや姫を得てしがな。

の如く、「も」が挿入されないのである。しかし打消的な準體言である場合は

世の中にさらぬわかれのなくもがな。

いとかく朽木になしはてずもがな。

の如く、實體語の場合と同樣「も」が挿入されるのである。

かやうな希望文では、その希望的主觀を表示して斷止せしめる助詞「が」「がな」等は極めて重要なる部分であると言はなければならない。勿論それは實體語斷止の實體文であるから、實體語はその上位的必須條件であるが、

その希望文である所以のものは助詞「が」「がな」に存するのである。之に對して感嘆文では「よ」「や」「か」「かな」「かも」の如き助詞は副次的である。それよりも實體語に先行する種々の修飾的部分が肝要であると言はなければならぬ。感嘆文にかゝる修飾的部分の先行がなければ、それは單なる呼掛に過ぎないのである。しかして呼掛は實體文の原本的なものとして、呼掛の對象物である實體語の存在をその生命とするのである。客體物的名が必須的である。かやうに考へて來ると實體文の本質は客體物に對する呼掛、卽ち物の名を呼ぶことで、其の最も原本的素朴的なるものは單なる實體語斷止、所謂呼格的放出であり、之より發して先行的客觀的に發達したものが感嘆文であり、後行的主觀的に發達したものが希望文である。

呼掛の本質は物の名を直接的に呼ぶことに在る。客體物に對する直接的な言語行動の表示である。そこに實體語としての最も素朴にして原本的なるものを赤裸々に表してゐるのである。呼掛として行はれる實體語は其の實體的性格を最も全一的に本質的に表すのである。然るに同じく實體語斷止でも、感嘆するものは實體物そのものに對して然せられるものではなく、之を樣相的なものとして狀態的なものとして延展せられたるものに對して情感を動かしてゐるのである。隨つてそれは觀念的に分析せられたものの全面でなければならぬ。そこに斷止する實體語は抽象的形式的となり、その極、單に文法的意味のものとしてのみ働き、實質的部分は之に先行する修飾的構造に存することとなるのである。又希望念願するものは只管主觀的方向に主力が注がれるものであるが、その對象は物の名とか物の狀とかといふものでなく、物の事でなければならぬ。斯樣々々に行はれる現象でなければならぬ。隨つて希望形式の文は實體語の裡に隱れてゐる現象性、準體言の內容を成す事に關するものでなければならぬ。希望文に

於いて、實體語の裡からかゝる現象性を誘出する力が助詞「が」「がな」に在るのである。以上の如くであるから實體文は名を以て斷止するものとして、呼掛に發生し、それが觀念的構造の方向へ發展するところに感嘆があり、文法的方向へ發展するところに希望があるのである。しかしてそれら實體文的一群の中軸は何處までも呼掛でなければならぬのである。總て實體文は、事物現象あらゆる物の名を呼ぶところに生誕する文の形である。

五

陳述文は、陳述語によつて斷止する文である。主述の統合關係に於て斷止する文形式である。主語と述語との矛盾的結合の只今に於て斷止し成立して行く文である。主述の統合は、そのまゝ句として連續し或大きな文の一部分となることも出來るが、それが斷止せる場合には、種々の陳述形式の文となるのである。陳述語は言ふまでもなく動詞（形式動詞をも含む）と形容詞とであるが、之等の斷止形が陳述文を成立せしめるのである。陳述文の運命とか性格とかといふものは常にその陳述語の斷止し結了して行く部分で決定せられて行くのである。內實的な判斷關係の如きものは文にとつては副次的なものでなければならぬ。故に陳述文の研究は專ら動詞とか形容詞とかといふものゝ斷止形態に求めて行かなければならぬ。

陳述語の斷止は如何なるものであるか。之に就き從來種々の方面から盛に研究せられて來たが、未だ文の成立根として考へられたことがないやうである　しかし之を徹底的に考へて行けば、其の種々相が軈て陳述文の種々相を生誕せしめる根的なものであるといふ考に到達せざるを得ないのである。かやうなものの中、陳述文の第三人稱的

性格、他稱的本質を最も適確に表すことの出來るものは、一般に終止法とか說明法とか平敍法とか、或は直說法などと稱せらるべき一類である。之に對して多少第二人稱的性格を帶び、行動的對客者的に行はれる命令法或は希求法とも稱せらるべきものは、稍〻特殊的な陳述語斷止であるとしなければならぬ。實體語斷止に於て呼掛は正系的なもので、第三人稱的に傾いた感嘆の如きものは傍系的のものとして考へなければならぬものであつたが、陳述語斷止に於ても終止は正系的なもので、第二人稱的に傾いた命令は傍系的なものと考へなければならぬ。しかして實體語斷止の感嘆は理智的に偏向せるものであり、陳述語斷止の命令は意志的に偏向せるものであつて、何れかと言へば特殊な言表の外餘り用ひられないのである。故に實體語の呼掛と陳述語の終止とに於て種々雜多のものを發展せしめ、現實に行はれてゐる文は主として此の二方式に集約出來ると言つてもよい位である。

終止法の原本的な形は

花が咲く。

人には負けぬ。

聞くも恐ろしい話だ。

これこそ本ものである。

夏は暑くて冬は寒い。

それでもよろしい。

たまにしか逢はない。

の如く、動詞、形式動詞、形容詞、助動詞等の終止形によつて行はれるものである。文語でも

しぬる人あり、生るる人あり。

牛馬を使役して人の勞を助けしむ。

たゞ專念につとめ勵むべし。

都會ははでやかなり、花やかなり、娯樂多し。

の如く、同樣終止形によつて行はれる。しかし對者に向かつて殊更疑問を發し、禁制を行ひ、確言し表情をする等の必要から各種の助詞を加接して斷止せしめるものがある。その中疑問を構成するには口語では

何處へ行くか。

それでよいと思ふか。

左樣でござりましたか。

の如く「か」を添へ、文語では

わが思ふ人はありやなしやと。（伊勢）

おのがすむ野の花としらずや。（古今・十四）

むなしき名のみたつときききや。（後拾遺・十八）

更に筆を投げつべしや。（源氏・梅が枝）

の如く「や」を添へる。文語で「か」を用ひる場合には連體形に添へられるのである。しかしそれは

世の中はむかしよりやはうかりけむわが身ひとつのためになれるか。（古今・十八）
絶えぬるか影だに見えばとふべきを。（古今・十四）
きりぎりす夜寒に秋のなるままによわるか聲のとほざかりゆく。（新古今・五）

の如く詠嘆的であり、實體語斷止的なものである。禁制を構成するには口語文語ともに

一度聞いたら決して忘れるな。
もう來るな。　生意氣言ふな。
そんなやかましい議論をするな。
汝過ちすな。　龍の首の玉とり得ずばかへりくな。

の如く、終止形に「な」を添へる。確言を構成するには口語では

ぢや待つてるぜ。
なか〳〵美しいぜ。
明日から早く起きるさ。
もうこれでいいさ。
さうですとも。
書けるとも。

の如く終止形に「ぜ」「さ」「とも」を添へ、文語では

誠にあはれなりかし。

さは思ひつかし。

さても君忘れけりかし、鶯のなく折のみや思ひいづべき。（大和）

の如く「かし」を添へる。外に文語口語ともに「は」「ぞ」を用ひるものがあるが、之は

げに面白かりけるは。

そは我も知り候は。

惣門は錠のさされて候ぞ。

さる事は我は知らぬぞ。

汝は何者なるぞ。

をみなべし草むらごとにむれたつはたれまつ虫の聲にまよふぞ。（後撰・六）

の如く連體形に添へるのである。表情を構成するには口語では

それはよかったな。

隨分見事だったらうな。

この方がいいやうだね。

ごめんなさいね。

中々感心な心掛ぢやの。

御苦勞でござるの。
僕は知らないや。
ぢや歩かうや。
何處へいつたえ。
これいくらだえ。
もう澤山だよ。
又來るよ。

の如く「な」「ね」「の」「や」「え」「よ」等を添へ、文語では

あしのうら葉の恨みつべしな。（後撰・十三）
秋風によもの山よりおのがじしふくに散りぬる紅葉かなしな。（拾遺・七）
氣上りてものも覺えぬや。
人をなほ恨みつべしや都鳥ありやとだにもとふをきかねば。（新古今・十）
春の野におふるなきなのわびしきは身をつみてだに人のしらぬよ。（拾遺・十二）
けふくれぬ花のちりしもかくぞ有しふたたび春は物をおもふよ。（千載・二）
あしべより雲ゐをさして行く雁のいや遠ざかる吾身かなしも。（古今・十五）
郭公なくやさ月のみじか夜もひとりしぬればあかしかねつも。（拾遺・二十）

の如く、「な」「や」「よ」「も」などを添へる。

以上の如き助詞の加接は、述語或は繫辭的なものの省略せられてあるものにも行はれ、終止法を構成することが出來る。それらの中形式動詞の略せられたものは賓位觀念に直接的に然るべき助詞が添加せられるのであり、實質動詞の略せられたものは必ず主格補格等を示す助詞に添加せられるのである。しかして口語では例へば

それぐらゐで追附く話か。

これは君のか。

これでもか。　こゝへか。

もうそれまでか。

知れた事さ。　それもその筈さ。

わたしも行きたいのさ。

それは綺麗さ。　紙でさ。

花見にさ。　これをさ。　これがさ。

當前よ。　あの方のおつしやる通りよ。

こちらの方が長いのよ。　さうよ。

なにすこしばかりよ。

どうならうとまゝよ。

わるかつたらごめんよ。
これきれいね。　よく鳴く虫ね。
ずゐぶん高いのね。　マツチ箱みたいね。

の如く、「か」「さ」「よ」「ね」などの場合に行はれる。文語でも

我こそは新島守よ。
もえわたる我が身ぞ富士の山よ。
ゆたのたゆたに物思ふころぞ。（古今・二）
名にめでてをれるばかりぞ。（古今・四）
教へし人はなくて幾夜ぞ。（拾遺・八）
とわたる船のかいのしづくか。（古今・十七）
おつる紅葉の數を見よとか。（古今・五）

の如きものがある。

文語では以上の如き終止法の助詞の或ものが、先行の敍述的觀念構造の中間的部分に現れる場合には、終止の形態がそれと相呼應して種々に變形するのである。所謂係結の法が行はれるのである。かやうなことは實は審美的文法とも稱すべき特異な文法事實であつて、しかも日本語ではそれらの樞要なる地位を占むるものであるから、別に體系を立てゝ詳細に論ぜらるべきものであるが、此處では只論理的文法機構の立場から其の概要に觸れて置くに止

める。その中「は・も・徒」の結と稱せられるものは終止形であるから特にこゝで言ふべきこともないのであるが、「ぞ」「なむ」「や」「か」が先行する場合には之を連體形で結ぶもの、「こそ」が先行する場合には之を已然形で結ぶものの二は特殊な終止方法であるから一言して置かなければならぬ。連體形終止の中、「ぞ」「なむ」の係るものは

ねて明すらむ人さへぞうき。（古今・四）

夏衣うすきながらぞたのまるる。（拾遺・十三）

その人かたちよりは心なむまさりたる。（伊勢）

夜なかうちすぐるほどになむたえはて給ひぬるとてなきさわげば（源氏・桐壺）

の如く、普通は敍述を強調し或は感情を籠める爲のものであるが、又

たれぞこのみわのひばらもしらなくに心のすぎの吾をたづぬる。（新古今・十一）

たが秋にあらぬものゆゑ女郎花なぞ色に出てまだきうつろふ。（古今・四）

の如く、疑問の陳述的從屬語を受けて係る「ぞ」は疑問斷止を構成する。「や」「か」の係るものは

まことにや同じ道には入りにける。（後拾遺・十七）

尾上の月にさよやふけぬる。（新古今・五）

いつのまに紅葉しぬらむ山櫻きのふか花のちるををしみし。（新古今・五）

さよか更けぬる千鳥なくなり。（千載・六）

の如く、それ自身で疑問を構成するのである。勿論

あまりてなどか人の戀しき。（後撰・九）

の如く疑問の從屬語を受けて係るものもあり、更に

などわが戀のふちせともなき。（古今・十一）

の如く疑問の從屬語のみ係り連體形終止をするものもある。次に「こそ」が係つて已然形終止をするものは

色こそ見えね香やはかくるる。（古今・十三）

かたみこそ今はあだなれ。（古今・十四）

人しれず春をこそまて。（拾遺・四）

の如く「ぞ」などより遙かに大なる强調力を有するものである。但し之は奈良朝時代のものに溯ると

己が妻こそ常めづらしき。（萬葉・十一ノ二六五一）

野を廣み草こそ茂き。（同上十・七ノ四〇一一）

の如く形容詞系活用のものは連體形終止であり、又係結の法が完備せられたと見るべき平安朝時代でも

更にいとこそいみじき。（落窪・二）

萬代をよばふ山邊のねのここそ君が仕ふる齡なるべし。（蜻蛉）

住のえ殿と申す所こそ京の尼上とておはする。（住吉）

の如き變則的なものもあるのである。

以上述べた如き終止法として一括すべき陳述斷止に對し命令法として一括すべき陳述斷止がある。こゝで命令と

いふのは命令、希求、勸誘、許容、放任等を表示するものを言ふのであつて、多く命令形を以て斷止するのである。

例へば

こつちへ來給へ。　前へ進め。

止れ、止れ、茱の花に。　赤勝て、白勝て。

ゆきて見む駒に沓かけ石原や十市の里に花咲きぬめり。（夫木・十一）

いざ子ども小舟早寄せかの見ゆる島わの蓮たをらまくほし。（同上）

富士のねのならぬ思にもえばもえ神だにけたぬ空し煙を。（古今・十九）

の如きものである。しかしてその際普通は命令を強化し、或は情緒を添へる意味の助詞を加接するのである。その中「い」「ろ」は口語にのみ用ひられる。例へば

來い、來い、白來い。

まあこちらの方にせい。

ちや勝手にしろ。

それみろ。

の如きものである。又「よ」「や」は文語にも口語にも用ひられる。

これを讀んで見よ。

仕事なされよ、きり〳〵しやんと。

待てよ。

向かふへ行つて居れや。

そんな事よせやい。

そんなことやめろや。

行けや、行けや、とく行け、我が子。

かゝれや者共と下知す。

忘れで訪ひ給へよ。

君わたりなばかぢかくしてよ。（古今・四）

ふみはよもみたまはじ詞にて申せよ。（大和）

朝露の思はむ所に猶さらばおぼししれよ。（源氏・夕霧）

文語では外に「かし」を用ひることがある。例へば

恨みがてらにきても見よかし。（拾遺・十九）

ありやなしやと人のとへかし。（後拾遺・十七）

の如きものである。

右は普通の命令法であるが、外に口語では

坊ちやんおいで。

早くこれをおし。

來て御覽。

の如く、連用形（又は漢語の動詞根）を以て勸誘、希求、命令等を表すことがある。しかしてこの種のものには

この本よんで見な。

早くそこを下りな。

早くこれをしな。

五時になつたら起して頂戴な。

の如く「な」を添へることもある。かやうなものに對し古いものでは

ぬばたまの夜の夢にを繼ぎて見えこそ。（萬葉・五ノ八〇七）

かくしつゝ遊び飲みこそ。（同上・六ノ九九五）

見し日の如く在りと告げこそ。（同上・二十ノ四四七三）

の如く、連用形に「こそ」を添へたものがある。從來はかやうなものを願望であると稱せられてゐたのであるが、實はそれは單なる內の願ではなくて、積極的に對者に働掛けて行く意味のものである。

命令に類似するものとして禁制を考へることが出來る。しかし禁制は普通終止形に禁制を表示すべき助詞「な」を添へて構成するのであるが、それは終止法の一方法に過ぎない。只文語では特有な禁制の構成方法がある。それは「なそ」の格などと稱せられるもので、禁制助詞「な」が先行の敍述的構造の中に現れ之を「そ」で結ぶ形式を

成すものである。しかし古くは

吾大王ものな思ほし。（萬葉・一ノ七七）

吾なしとな佗び吾兄子。（同上・十七ノ三九九七）

の如く「そ」を添加しないものもあるところを見ると、「そ」で結ぶことは「なそ」格構成の本質的條件ではないらしい。矢張普通に謂はれてゐる係結の法と同様、先行助詞「な」に呼應する活用形を先づ問題としなければならぬのである。それは

我が故に思ひなやせそ。（萬葉・十五ノ三五八六）

海原のうへに浪な開きそぬ。（同上・二十ノ四三三五）

物思ふわれに聲な聞かせそ。（古今・二）

大將をな見そ。（宇津保・國讓中）

うたておそろしきまでな聞えさせ給ひそ。（源氏・浮舟）

さらばなたのまれそ。（枕・七）

の如く、多く連用形を以てするのである。しかし三段活用では

いざ子どもたはわざなせそ。（萬葉・二十ノ四四八七）

吹く風をなこその關と思へども

の如く未然形を以てするのである。しかして「そ」はかゝる連用形、或は未然形斷止を補助する意味の副次的なも

のでなければならぬ。

六

從來多くは文の範疇に就き、說明文（Declarative Sentence）疑問文（Interogative Sentence）命令文（Imperative Sentence）感嘆文（Exclamative Sentence）の四を以て考へられて來たやうである。しかしこの四範疇はその發祥せる西洋語に於てこそ或は便益あるものであらうが、之を採つて直ちに日本語に當篏めて見ても、必ずしも正當なる文の範疇づけを爲し得るとは限らない。勿論單に意味論的に之を區別するならば又別問題として、眞に言語學的文法學的な範疇を行ふ爲には矢張日本語の中から日本語獨特の範疇を發見して行かなければならぬのである。のみならず、右四範疇は現今の文法學的水準を以てしては彼の地の言語にとつても卽實的であるとは言ひ得ない點があるのである。そこにセシエなどの言ふ觀念文（phrase-idée）思惟文（phrase-pensée）の如き考へ方もあるのである。私はセシエのかやうな文の考へ方は極めて進步せるものであると思ふが、しかし未だ判斷作用的殘滓を眞に脫却せるものとは言ひ得ない。小林英夫氏の凝縮せる統合としての句と、實現せられたる統合としての文の區別の如きものと雖も、論理學的命題が常に之等を支配してゐるのである。かやうな意味から山田博士の喚體述體の區別は極めて徹底せるものと言はなければならぬ。勿論文と句に對する考へ方に就いては上述の如く山田博士の說かれるところと見解を異にせざるを得ないのであるが、之を喚體的なものと述體的なものとに區別するところは博士の所說をそのまゝ繼承して行かなければならぬ。山田博士も言はれるやうに、實體語の最も重要な機能は呼格として

呼掛に立ち得るといふことでなければならぬ。陳述語は陳述斷止に立つ語であると同時に實體語は實體斷止に立つ語でなければならぬ。かゝる實體語の斷止力が成立因となつて喚體の文といふものが形成せられ、之に對して陳述語の斷止力が成立因となつて述體の文といふものが形成せられるのである。しかして私は之等を直ちに實體文、陳述文と稱するのである。即ち實體文といふのは實體語が眞に斷止するところを生産點として成立つ文の一類であり、陳述文といふのは陳述語が眞に斷止するところを生産點として成立つ文の一類であり、ところであるが、その中先づ實體語斷止の支配する實體文と陳述語斷止の支配する陳述文とがあるのである。しかも兩者の中に又それ〴〵その斷止法の相異により種々の文が成立して行くのである。

單なる實體斷止の文は呼掛である。從來呼格と稱せられたものを其の儘一種の文と見たものが眞の意味の實體語斷止の文の姿である。語文とか文對當語とか稱せられるものの横行する語彙的言語狀態は、常にかやうな呼掛的並列の粗密波と見なければならぬ。呼掛的放出が語文であり、それが又そのまゝ文對當語として記憶の中に留められるのである。かゝる原本的なる呼掛を根として客觀的方向には感嘆文、主觀的方向には希望文が成立する。かくて形態上感嘆文は觀念的構造の方向に發展し、希望文は文法的構造の方向に發展してゐるのである。勿論、原本的と考へられる呼掛的なものにも先行的或は後行的に延展せるものはあるにはある。しかし、それらは何れかと言へば逆流的なものに過ぎない。しかも皆修飾するとか補助するとかと言つたもので、實體斷止そのものの性格には何等變化なきものである。然るに感嘆文に於ては斷止する實體語は形式化し其の實質は之に先行する修飾的部分に移動し、希望文に於ては斷止する實體語に必ず「が」「がな」の如き希望的助詞を添加しなければならぬのである。し

かして感嘆文ではその感嘆の對象は單なる名としての實體物ではなく狀としての實體物であり、希望文ではその希望の對象は事としての實體物である。右の如き感嘆文にも希望文にも亦樣々のものがあり得る。卽ち斷止の種々相によつて種々の文の姿を細別することが出來るのである。

陳述文の原本的なものは終止形を以てするものである。陳述文は主述の統合を根として成立するものであるが、かゝる根的なものの最も純一なる表れは終止形でなければならぬ。しかしてかゝる原本的な終止形斷止を軸として種々の終止法があるのであり、終止法に對立して第二人稱的方向に傾ける命令法があるのである。終止法は最も豐富なる斷止方式と言ふべく、その添加せられる助詞の力によつて疑問とか禁制とか確言とか感嘆など雜多な文種に分れるのである。しかも文語では更にそれらの助詞の或ものが斷止點を超えて先行することによつて、係結關係の如き形態部相互の下位的相關々係と言つたものも生じ、益々それが複雜となつてゐるのである。命令法は一般に命令形を以てするものであるが、それらの中にも助詞の添加等により種々のものに分れるのである。